

---

# 2つの探偵さんのお宅と1つの怪盗さんのお宅

ソナチネ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

2つの探偵さんのお宅と1つの怪盗さんのお宅

### 【Nコード】

N6059R

### 【作者名】

ソナチネ

### 【あらすじ】

新蘭平和快青高佐の未来家庭小説です。なんじゃそれえ、と思  
う方、まずはクリックしてみてくださいな

## ネオンの中に

きらびやかなイルミネーションが、街を行き交う恋人たちに優しく包み込みはじめた。細雪ほこゆきの舞う中で、ケーキ屋のショーウィンドウにたくさんの笑顔が映ったのが見えた。

新一は腕時計に目をやった。七時ジャスト。約束の時間から十分以上すぎた。はたしてきてくれるんだろうか、あいつは・・・

凍りつきそうなほど冷たいテラスに手をついて、新一は米花町の大通りを見下ろした。じっと目を凝らしてみただけで、いない。見つけれなかった。

諦めて、ぼおっと米花町を眺めた。寒風に吹かれる米花町は、いつもよりもすこしきれいに見えた。ここは自分を今まで育ててくれた町。そしてあいつと出逢わせてくれた町。そう考えると、愛おしく感じた。自然に笑みがこぼれた。

「新一」

新一は、テラスから手を放して振り返った。

「新一、遅れてごめんね。」

息を切らしながらも微笑む蘭あいつの姿があった。

新一は目を見張った。鼓動が早鐘を打つ。こんなにドキドキしたこと、今まであっただろうか。こんなに女子に見惚れそうになる自分

がいたこと、今まであつただろうか。

「い、いや、別にいいけどよ……。んじゃ、行くか。」

「うん」

どうして本当のことが素直にいえないんだろう。今日こそ言つべきなのに。どうして可愛いじゃねえか、の一言も言えないんだろう。そう思えてもどかしく感じたが、楽しそうにしている蘭を見ていると、新一の気分は和らいだ。

「ねえ、行ってくつてどこへ？も、もしかしてねえ新一、それって……」

「その通り。あのレストランだよ。」

## シャンデリアの愛誓（キス）

「何でも好きなもの頼めよ蘭。」

「え、いいの？」

「蘭だから・・・蘭だからいいんだ、別に。」

不器用な新一を、蘭は理解していた。だからこそ、笑みがこぼれた。

「ありがとう新一。何かおいしいと思う？」

メニューを広げながら上目づかいうわめに新一に尋ねる蘭。

それに新一が悩殺されそうになっているとも知らずに、蘭はとびきりの笑顔で「あたしこれがいいなあ」なんていったものだから、新一は固まってしまった。

「新一？ねえ新一ってば」

蘭にそうやって声をかけられ続けてから少しほどたった後、ようやく新一は我に返った。

「え、あ、うん」

「どうしたの、新一？熱でもあるの？」

蘭が新一の額に手を当ててきた。なされるがままに、新一は身じろぎせずに蘭の手の冷たさに目を閉じた。

あのNY帰りの新一と蘭の、立場が今逆転していた。

「熱はないのにな。」

新一の額から手を放し、席に着いた蘭は不思議そうな顔で新一を見た。

「いや、だからさつきはその・・・なんていうか・・・」

新一はなんと伝えようと迷った末、ようやく小さな声でつぶやいた。

「・・・つたから」

「え？」

「だからさ・・・・その・・・おめえさ、さつき俺にさ、『何がおいしいと思う?』って聞いてきたと来た時さ、その・・・ちよっと上目づかい・・・・だったじゃん?」

「え、あ、そうだったけ？」

「あ、ああ。で、それがそのさ・・・・そん時の蘭が・・・・か、可愛かったからよ。」

お互いにどんどん紅潮してく頬。見つめあったままなので、まるわかりだ。

蘭は何も言えなかった。はずかしくて、でもうれしくて。

そんな気持ちが一にもあったのだろう。お互いしばらく何も喋らなかつた。

結局注文し終えたころには、時計の針は八時を指していた。

## 告白

デザート、ザッハトルテが運ばれてきた。

「なあ蘭、食べる前にちょっときいてくんねえか」

「え？あ、うん。いいけど・・・」

シャンデリアの明かりで光るザッハトルテに見惚れている蘭に、新一が声をかけた。

不思議そうな顔で見つめてくる蘭にどきまぎしながらも、新一はきりだした。

新一の心はもう決まっているのだ。

「ちっちゃいころからもそうだし、恋人として・・・つきあってからもそうなんだけだよ」

「うん・・・？」

「俺、やっぱりわかったよ。」

蘭が小さく「え」と声を漏らしたのが遠い遠い世界での出来事のように気がした。

「俺、やっぱり蘭のことが好きなんだよ。ずっとずっと。ほんとに蘭しか好きになれない」

新一の頬が、目頭が、何もかもが一気に熱を帯びた。でも、まだ言いたいことはこれからだ。ほおつとする頭をなんとか醒さまそうと新一は深呼吸して蘭にもう一度向きあつた。

「ずっとずっとそばにいたいんだ、俺。蘭の・・・蘭のそばに。だから結婚してほしい」

俯いた蘭の瞳から涙が溢れたのが新一に見えた。

そして、涙にぬれた、でも晴れやかな笑顔で小さく頷いた蘭も。

きらびやかなシャンデリアが、二人の新たな門出を祝福しているようだった。

ありがとう

嬉しくて嬉しくて、なんにもいえなかった。

そんな蘭を、新一は少々慌てながら、しかし愛おしげに見つめていた。

いつもの蘭の声で、返事が聴きたかったから。

「らん、だいじょうぶか？」

蘭の背中をさすりながら、新一は優しく問いかけた。

「ありがとう、新一。嬉しくて、今なに、も……」

「わかってる。なんにもいわなくていいから」

蘭はまた、俯きながらうなずいた。だがしかし、それはさっきよりもずっと、力強いものだった。

誰よりも、幸福な時間を2人は優しく月夜に紡いだ。

大変な挨拶？

「やっと結婚するんか」

「よかったなあ蘭ちゃん、工藤君っ」

「若干、つてかけっこう遅いけどな。二人とも」

「快斗っ！なんでそういう風にしか言えないのっ。新一君、蘭ちゃん、ほんとにおめでとう！」

新一が蘭にプロポーズした二日後、二人からのメールで事の内容を知った彼ら四人はすぐにそれぞれ東京、大阪から飛んできた。

「なんでコクってから二日もかかるんだよ、新一。その間はなんなんだよ」

「ほんまにやで工藤。もっと早<sup>は</sup>よ教えてくれてもよかったんちゃうか？それともなんや、まさかとは思っけど、躊躇<sup>ためら</sup>ってたんか？」

「なんでそんななんゆうん平次っ！そんな言い方ないやろ？あんたちよっとほんまいちびりすぎやで」

「快斗もだよ。新一君と蘭ちゃんにだって事情があったからに決まってるじゃない」

「んじゃあきくけど、どっという事情だよ青子」

自分そっくりな夫婦と、関西弁で烈火のごとく言い争う夫婦。それぞれ目の前で繰り広げられるその口喧嘩に新一と蘭は、いつものことだとは知りながら、多少啞然としていた。だが黙っていてもこのメンバーは仕方がない。新一は苦笑気味に割り込んでストップをかけた。

「いや、ごめん。ちゃんと早くに報告しなかったのは悪かったなっ  
て思ってる。みんなごめん。だけどこれには青子ちゃんが言った通  
り、事情があつたんだ。」

「事情？」

快斗、青子、平次、和葉は思わず四重奏になっていた。それに頷い  
て、今度は蘭に話がバトンタッチした。

「あのね、結婚する前って挨拶に行くでしょ。新一のところはすぐ  
に許してもらえたんだけど、うちのお父さんでけっこうもめちゃっ  
て・・・」

二日前。

新一と蘭は、蘭の両親である毛利小五郎と英理のもとを訪れていた。  
インターホンを鳴らす新一の手は緊張で震えていた。育った家、育  
てくれた親であるはずの蘭でさえ、少し手が汗ばむのを感じてい  
た。

「いらっしやい、新一君、蘭」

案の定、ドア越しに顔をのぞかせたのは英理だった。少しめかしくんではいるが、いつもと変わらない髪の手結い方、声、口調。だが、緊張が走っているのはやはりぬぐえない。

「どうぞ。中に入って」

靴をそろえて脱ぐ。二人とも、見慣れた玄関での普通の習慣だ。だが、そんな一つ一つの所作にも、懐かしさを超える重みを今日は感じずにいられなかった。

中に入ると、いつもはふんぞり返ってビールを飲みながら競馬の実況を見ている小五郎が、神妙な顔で正座をして待っていた。いつもどこか間の抜けている雰囲気のある小五郎だが、今日はそんな、ある意味での和みのかけらはひとつもない。

新一と蘭がおなじように正座するのを待ってから、新一よりも早く小五郎が切り出した。

「新一。おまえ、ここに来た意味、ほんとにわかってんだろうな。本当にわかってんだろうな」

「はい、わかってます。」

「おめえが蘭を・・・蘭を・・・」

びしっと言ってやるうと意気込んでいた小五郎だが、いざとなるとしどろもどろになってしまった。

そんな小五郎とは対照に、新一は潔くそのあとを続けた。

「蘭を俺の生涯で最愛の人として誓い、そして、絶対に幸せにします。」

事は工藤家のように淡々と進むはずだった。だが小五郎の、新一を見る目つきはなぜか鋭い。

「お父さん？」

小五郎の表情を読み取った蘭は、怪訝けげんな顔で救いを求めるように新一を見た。

だが、新一も何も言えなかった。

「新一。」

ややあつて、うつむいたままの小五郎は、低い声で新一を呼んだ。

「はい。」

お互いの視線が交差した。そこには誰も何もいえないような、緊迫したものがあった。そして次の瞬間には、妻である英理さえもが驚きに目を見張っていた。

「俺は……俺はお前を蘭と結婚させるのは許せない。」

大変な挨拶？（後書き）

## 大変な挨拶？

凍てつくような空気が一瞬にして四人の間に張りついた。

確かに結婚の挨拶というのは、まだ二人の間でしかその関係を了承していない。それを伝えるために行うためのものだ。

だが、新一と蘭の場合は違う。特にここ最近など、「結婚を前提とした付き合い」という意識が親たちの間であった事実を自覚せざるを得ないほどにまでなっていた。それほどまで、親たちは新一と蘭のことを現状だけではなく、将来のことまで認めていたのだ。そのはずなのだ。

だからこそ、新一と蘭は信じられなかった。

英理は思わず小五郎にいきりたつた。

「あなたっ！どういうことなの？！昨日までは賛成だったじゃないっ」

「昨日まではな」

「どうしていつつもあなたはそうやってコロコロ意見を変えるの？今回は許せないわよ。こんなに大事なことを話し合っているのにこんな・・・こんなのひどすぎるわよっ」

堪忍袋の緒が完璧に切れた英理の、悲鳴にも似た叫びを聞いて、よ

うやく新一と蘭は我に返った。

「お、お母さんっ！落ち着いて！」

「そうですね。とにかくまず・・・理由を聞かないと・・・」

憤然としながらも、なんとか座りなおした英理を新一は一瞥<sup>いちへつ</sup>すると、もう一度小五郎に向き直った。

「どうして許していただけなのですか？」

「おまえはわからねえのか」

新一は少し小五郎から視線を落とし、俯いた。わかってる。わかってるけど、わかってるけどさ。

静かに息を吐いて顔を上げた新一は、泣き笑いの様な顔だった。

「僕が三年前に江戸川コナンになったから、ですか」

あ・・・、と蘭が呟くのが隣で聞えた。

「ほかになにがあるってんだ」

小五郎にきつく言い放たれ、新一は思わず唇をかみしめた。

工藤新一という姿に戻って蘭と付き合えるようになってから、幾年もたっていた。お互い戸惑ったり、解釈の違いがあつてのスタートが「江戸川コナン」があつたことによつてあつたわけだが、それも

束の間のことだった。すぐに普段通りの、いや、普段以上の二人の生活が始まったわけだから。

そう。幸せの中で二人は、今の二人となった第二の原点を忘れていた。

「あなた・・・」

「別に今のお前を責めてるわけじゃねえぞ」

止めようとする英理を軽く制し、小五郎はそう言った。

「お前が戻ってこなかった間、蘭はずっとお前が帰ってくるのを待ってた。おめえが蘭の隣にいてくれることで、蘭が幸せそうなのは間違いねえさ。」

照れ隠しのつもりだろうか、小五郎はあろうことか新聞の競馬の記事を広げて読み始めた。

「ちょっとあなたっ」

「お、おとうさん・・・」

心配する英理と蘭には知らんぷりで、小五郎は新一に尋ねた。

「ただ、これからのことを考えると、やっぱり不安なんだよ。」

「これからのこと・・・」

「そうだ。おめえがああ黒の組織に見つかったのは、おめえの無鉄砲さが原因だろが。」

「それはそうですけど・・・でも、これから悪い事をしようとするやつを放っておくなんて」

「ま、そりゃ確かにそうだけだよ。けどおめえ、そんな時ほっとかれたやつのが持ちにもなってみろよ」

横目で見ると、蘭が俯いていた。新一は何も言えなかった。

「で、結局黒の組織に見つかってコナンになって・・・」

「お父さんっ！」

新一をなじり続ける小五郎の声は、蘭の声で遮られた。

「らん・・・」

蘭の瞳には、涙があふれていた。一粒、また一粒と頬を伝っておちていく涙、涙。

「もういいよっ。もうこれ以上新一に何も言わないでよ！」

「蘭、でもおっちゃんの言うてることは全部ほんとだよ。そのあと蘭達を巻き込んだのも、みんなみんな好奇心に負けたバカみてえな無鉄砲さが原因なんだから。全部俺が悪いんだから」

「無鉄砲だけど・・・無鉄砲だけど、でも新一はそれ以上に優しいし、守ってくれたもん」

しゃくりあげる蘭を見て、新一は我慢できなくなった。無礼ではあるが、これ以上、蘭を泣かせたまま放っておくことなど、新一には出来なかった。

新一はそつと、蘭を抱きしめた。小五郎と英理の前で蘭を抱きしめることは抵抗があった。でも、そのせいで最初は強張っていた手も、蘭に触れることで感覚を取り戻した。

「優しいのはおめえだよ、蘭。守ってくれたのも……ちよつと情けねえかもしんねえけどさ、全部全部、蘭。蘭だよ」

違う、違うよ新一。本当に優しく、いつもあたしを守ってくれたのは新一だったでしょ。

蘭はそう言おうとしたが、言葉が出なかった。

俯く蘭をのぞき込むように視線を合わせながら、ゆっくり背中をさする新一を見て、小五郎は何も言えなくなっていた。

無礼さに唾然としていたのではない。多少不器用ではあるが、こんなにも娘を大切に想っている。

ずっと迷惑をかけていたから幸せにしよう頑張っているのではない。自然に……新一は、蘭を心から好きなんだろうという確信を、鮮明に感じ取っていたのだ。

大変な挨拶？（後書き）

ちょっと微妙ですが、次回に飛ばします！

それは再びリビングルームへ

「と、いうわけで・・・」

「やっとその後に許してもらえたのよ、お父さんに。」

チーズケーキを切り分けながら、蘭はため息をついた。6人分に切り分け得られたチーズケーキが、一皿ずつわたっていく。

「ほお。なかなかええ話やないか。」

さっそくチーズケーキをぱくつきながら、平次は言った。

「ほんま、ええ話やわあ。工藤くんむっちゃかっこええやん」

「ほんとだね！蘭ちゃんいいなあ」

「おい青子、おめえそれどういう意味だよ。俺はなんなんだよ俺は。」

「へえ、快斗、俺に妬いてんだ。キザなくせに。」

「妬いてねえし。キザじゃねえし。っていうか、一番偉いのは新じゃなくってさ、蘭ちゃんじゃないの？」

「どうして？快斗くん」

洗い物を終えた蘭が、エプロンはずしながらリビングに来た。淡いピンクのフレアなエプロンは、家庭的な蘭のイメージにとてもよく似合っている。

「だつてさ、蘭ちゃん。蘭ちゃんはずっとずっと新一のことを待ち続けてたわけじゃん？新一ほど待たされてたらやっぱりほら、他の奴に目がいつたりするじゃん？」

「ううん・・・そうかなあ？」

首を傾げる蘭とは反対に、ぶんぶん首を縦に振って頷く和葉。

「確かにせやんねえ。あ、せやけど快斗くん。多分あれやで。蘭ちゃんが一番優しいから、ううんもそうやし、蘭ちゃんの周りには工藤くんぐらいのええ男なんて他におらんのとちゃう？」

「か、和葉ちゃん・・・」

「なるほどねえ・・・って、なんかさらっとすげえよ和葉ちゃん。」

「和葉お前、今米花中の男、敵に回したで。」

「別にええよ。あたし大阪の人間やもん。」

「服部、ひよっとして和葉ちゃん、おまえよりも強いんじゃないかねえか？」

薄ら笑いを浮かべて冷やかす新一に、平次はムキになって否定した。

「っ、んなことあらへんわ！そら喧嘩したら俺が勝つに決まったるやんけ！」

「ほお〜？ほんととか〜服部？」

「しつこいな。ほんまやつちゅうてるやろが。」

「ほんととか〜？」

0.5秒前の4文字に、平次はついに堪忍袋の緒を切った。怒りの形相の平次を前に、新一は後悔したが、もう遅い。

「工藤おおお！！おまえなんや！人がせつかく祝いに来たっなのに、なに人ばかにしよんねん！しつこいんじやこのボケ！！」

「わりいって服部。ごめんごめん」

はじめはテーブルの上で争っていただけだったが、すぐに二人は追いかけてつこを始めた。そこに「俺も俺も〜」と快斗が参戦して、事態はややこしいことになった。

そんな男どもを冷ややかに見つめてため息をつく、その妻たち。

「ほんつまあほやなあ平次は。子どもかつちゅうねん。」

「新一もなにやってるんだろ。子供よりも子供かも。」

「快斗の精神年齢は2歳だからしょうがないかな……。でも蘭ち

やん、ほんとおめでとう！新一くんと一緒になれて本当によかった。  
青子も嬉しいんだよ」

「青子ちゃん……」

「なあ。ほんまおめでとうやわ蘭ちゃん！工藤君にいっぱいいいっぱい大切にしてもらってや！」

「和葉ちゃん……ありがとう。二人とも、本当にありがとう。」

思わず、蘭の頬を涙が伝った。そんな蘭を見守る和葉と青子のまなざしは、なんだかとても優しいものだった。

まだ男子軍団が暴れ回っていたのは、それはまた別のお話。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6059r/>

---

2つの探偵さんのお宅と1つの怪盗さんのお宅

2011年10月13日15時51分発行